館報 教育記念館

No.69

平成19年10月 発行

「自然に育まれたとやまの教育」展

富山県版造形教育作品展

多彩な行事

楽しい内容

マセマティカルワールド展

思考道場・なるほど納得ゼミナール

◎教育時評　富山県総合教育センター所長　浅田　茂 …… 2

◎第17回　郷土の先賢顕彰者　●可西希代子　●密田　孝吉 …… 3

●土池弥次郎　●継続顕彰者 …… 4

◎恒例展「富山県版造形教育作品展」、「きらめき未来塾」

「マセマティカル・ワールド展」 …… 5

◎特別展「自然に育まれたとやまの教育」展 …… 6

◎財団支援事業、今年度後半の恒例展予定 …… 7

◎恒例展「子どもの目・自然不思議発見」写真展、あとがき …… 8

発行所／財団法人　富山県ひとづくり財団　富山県教育記念館　〒930-0018 富山市千歳町 1－5－1

☎(076)444－2000　FAX(076)444－2001　E-mail:toyama@t-hito.or.jp　http://www.t-hito.or.jp

（教育記念館会議室ご利用の場合　☎(076)433－2770）

発行人／富山県教育記念館　館長　齊藤和夫

人と人とをつなぐもの　－研修についての雑感－

富山県総合教育センター
所長　浅田　茂

勤務先の県総合教育センターでは、さまざまな研修が行われている。私は時たま、講師の方にお願いして、講義を聞かせてもらうことがある。そうした講義の中から、印象に残るものをいくつか紹介したい。

初任教員のための研修には、「社会人としてのマナーを身につける」講座があって、マナーの基本についてあれこれと指導がなされていた。大きなベニヤ板を使って、背筋を伸ばした美しい形のお辞儀をする方法も教えられていた。人と接する際に笑顔を保つことの大切さが説明されたあと、顔の筋肉や舌を大きく動かして、「いい表情を作る」ための実技練習もあった。

カウンセリング関係の講座の一つ、「アサーション理論と実践」に出席したこともあった。この講義（演習を含む）では、例えば次のAやBの言葉が、相手にどう受け取られるか、またそれが、話し手の気持を適切に表現しているかどうか。そうしたことが、講師と受講者の間で論じられていた。（ちなみに、講座名の「アサーション」は、「自分も相手も大切にした自己表現」と訳されている。）

A．（待ち合わせの時間に遅れてきた人に対し）「こんなに遅くまで何していたの」

B．（今日のネクタイ素敵だねと言われた時に）「これ？　バーゲンで買った物だよ」

受講者は、上記のAやBの言葉を実際に発したり、聞いたりすることを通して、日ごろあまり深く考えずに使っている言葉について、いろんなことを感じ取り、考えを深めたのではないだろうか。

「外国人児童に日本語を教えるための講座」も聞かせてもらった。長年日本語教育を実践している講師の方が、体験に基づいて話される事柄は、たいへん新鮮に感じられた。例えば、外国人の子どもに日本語を教える際に、「ない」と「ある」、「同じ」と「違う」、「見える」と「見えない」などの単語を初期の段階で教えておくと、後の指導がしやすくなるという話などに興味をひかれた。日本語が全く分からない子どもに、「ない・ある」や「同じ・違う」を教える手品的な方法を、講師の方が簡単な道具を使って説明されるのを見聞きして、新分野を開拓してきた人の工夫に感心した。

さて、ここに紹介した三つの講義の題材－しぐさや表情、ことばと心理、外国語としての日本語－の共通点を強いてさがせば、「人と人とをつなぐもの」と括ることができる。とすれば、センターの研修には、「人と人とをつなぐもの」について理解を深める趣旨のものが多くあるのだな、というのが私のささやかな発見であった。

そんなことを考えていて、ふと思い浮かんだのが、富山大学客員教授の寺西康雄氏の講義だった。氏は、初めて子どもと会うとき、剣玉さえあれば、サッと心がつながる、という信念をお持ちだった。講義の時に、その一端を披露された、見事な剣玉の技を拝見し、また剣玉との長い付き合いをお聞きして、「さもありなん」と思った。

形のない言葉やしぐさ、そして、剣玉という有形の物。世にある、有形無形さまざまなものを、人と人との間をつなぐことに役立てたいものである。

第17回　郷土先賢室顕彰者紹介

現代舞踊の発展に努めた県舞踊界の第一人者

可西希代子（かさい きよこ）

（1925～1995）

可西希代子（本名可西外美子）は、大正14年（1925）高岡市東下関に生まれた。幼いころから踊るのが好きであった。

スポーツ万能で、下関小学校６年の時には走り幅跳びの県新記録をつくり、高岡市立高等女学校では、400mの富山県代表として神宮大会に出場した。競技の前夜に虫垂炎が再発したが、痛みをおして走りぬき、新聞のトップ記事を飾った。

恩師の勧めで昭和薬業専門学校に進学したが、戦争のために中退。高岡に戻り志貴野幼稚園に勤めた。園では子どもたちの踊りを振り付けて大評判となり、その後、振り付けの依頼が殺到した。

昭和21年叔母本林喜代の養女となり、自宅で教室を開いたが、自己流の踊りに飽き足らず「踊りの基本を学びたい」と上京、大野弘史、和井内恭子夫妻に師事した。

昭和23年本林創作舞踊研究所（後の可西舞踊研究所）を設立、伏木劇場にて発表会を開催した。

昭和25年踊り手として全国舞踊コンクールに入賞するとともに、生徒たちと創作舞踊研究発表会を歌舞伎座で開催した。昭和30年、研究生が全国舞踊コンクールに初参加で入選を果たし、指導者としてもその才能が認められた。

昭和31年に工芸家の可西泰三氏と結婚。舞踊と美術、部門は異なるが夫婦で芸術の道を歩み始めた。

昭和35年には現代舞踊の第１部、第２部の両部門で第１位の文部大臣賞を受賞する快挙を成し遂げた。その後30年以上にわたり各種コンクールで輝かしい成績を収め、「富山に可西あり」と県舞踊界の名を全国に高めた。

また、地域を題材とする創作舞踊の公演を意欲的に行ったり、海外公演にも積極的に参加したりするなど舞踊界の発展に努め、富山県文化功労表彰、文化庁地域文化功労賞などを受賞、平成２年富山県芸術文化協会会長に選任された。平成３年東京で行った40周年記念公演「立山まんだら－愛・模索の回廊」は、文化庁芸術祭賞に輝いた。

平成７年69歳で永眠。希代子の踊りにかけた熱い思いと舞踊理念は、後継者である可西晴香と多くの研究生に受け継がれている。

専門員　森田　洋子

水力発電の実現に青春をかけた人

密田孝吉（みつだ こうきち）

（1872～1932）

密田は、密田家の分家（兵蔵（ひょうぞう）家）の長男として、明治５年（1872）１月１日、富山町（現富山市）に生まれ、後に三代兵蔵を名乗った。密田家は“富山の豪商”といわれ、江戸時代から売薬業を営んでいたが、明治時代の初めに金融業に転換し、広貫堂や北陸銀行の創設に関わるなど、富山県経済の発展に大きな功績を残した。

慶応義塾を卒業した密田は、電気事業を計画していた本家の密田林蔵と協力して費用（約545円）を集め、明治27年（1894）５月、30日間にわたって開催された富山市設勧業博覧会で県内で初めて電灯をともした。これは火力発電によるもので、アーク灯１基と多数の白熱灯が点灯された。電気による明かりは人々を驚かし、当時の新聞は人々の関心が高かったことを報じている。

密田は、このことをきっかけに青年実業家、金岡又左衛門と巡り合い、以後、二人三脚の「電気王国富山」の基礎づくりが始まった。当初、密田は火力発電を考えていたが、金岡から水力発電を紹介され、水力発電の研究を進めていった。しかし、研究といっても参考とするものがなく、密田が手に入れることができたのは米国ゼネラル・エレクトリック社のパンフレットだけであった。

密田はまず、水力発電所の建設にふさわしい場所を探し求め、苦労の末に、電気の消費地である富山市街地にも近い大久保村塩（現富山市塩）の大久保用水に建設場所を定めた。

次に当時としては珍しい株式募集を行い、多くの困難を乗り越え、明治30年（1897）11月23日、富山市で富山電灯株式会社創立総会を開き、金岡が社長に、密田が代務人（支配人）に就任した。

金岡・密田らは、建設に反対する地元住民を説得し、最大出力150kWのゼネラル・エレクトリック社製の発電機を備えた大久保発電所の建設に着手した。着工から１年余り後の明治32年（1899）４月１日、富山市に送電を開始した。家庭電灯用ではあったが、北陸初の壮挙であり、「電気王国富山」への第一歩であった。

開業後、業績は順調に伸びたが、明治32年８月の富山市大火で、需要家の四分の三を失い、富山市星井町の本社社屋も焼失した。しかし、金岡・密田らの努力により、数年のうちに電気を各家庭に送ることができた。

その後、密田は富山電気株式会社（明治40年改称）支配人、日本海電気株式会社（昭和３年改称）取締役を歴任し、県下の電気事業に大きな功績を残した。昭和７年（1932）３月８日永眠、60歳であった。

専門員　松本　純

呉羽梨の慈父

土池（どいけ）　弥次郎（やじろう）

（1872～1956）

呉羽梨の先駆者。明治５年（1872）婦負郡西呉羽村（現富山市吉作）に生まれる。温厚で研究心の強いことから地域の人々の信望が厚く、20代後半には吉作の農業実行組合長を務めた。

弥次郎が初めて日本梨の栽培に乗り出したのは明治30年代初頭といわれている。吉作一帯は稲作に必要な水源を溜池だけに頼らざるを得ず、日照りが続くと水不足に悩まされた。そうした現状を何とかしたいと考えた弥次郎は、苦しむ農家を救うべく稲に代わる作物を探し、全国を視察してまわった。東京の興農園を訪ねたとき、「太平（たいへい）」という青梨品種を知り、早速苗木を30本購入して植えてみた。それは４～５年で見事な実をつけた。しかし、甘みが少なく病虫害に弱い品種であったため、次には「長十郎」という赤梨品種の苗を取り入れ試作した。その結果、長十郎は形や味がよく病虫害にも強く、しかも収穫量も多いことが分かった。その後、作付け面積を増やすとともに、地域の人々にも熱心に梨の栽培を勧めた。その甲斐あって大正６年には栽培面積は30ヘクタールにも及んだ。

ところが、大正末期に病虫害が大発生し、梨は全滅の危機に瀕した。弥次郎は打ちひしがれている人々を粘り強く激励して回り、日夜病虫害と闘った。やがて、新農薬と散布器具が導入され、栽培は再び盛んになっていった。生産が増えるにつれて市場の拡大の必要性を感じた弥次郎は、自ら大阪に出向き販路を開拓した。

昭和12年には大日本農業会総裁より農事改良功労者として、富山県知事より園芸功労者として名誉ある表彰を受けた。同年には、有志の手によって頌徳碑も建立されている。その後も、戦争激化にともなう強制伐採や県外出荷の中止などの困難を乗り越え、戦後の梨園復元、集団栽培団地の造成など、84歳で亡くなるまで、梨の栽培と地域の振興に一生を捧げた。呉羽梨の栽培の技法と魂はその後も脈々と引き継がれ、昭和50年、呉羽果実出荷組合連合会は全国朝日農業賞を受賞した。

専門員　関原　秀明

平成19年度も引き続き顕彰される郷土先賢者

○「善の巡環」という経営哲学に基づき世界的企業を創り上げた実業家

吉田　忠雄（1908～1993）

高等小学校を卒業後、兄の店で働く。20才の時、貿易商を志して上京。就職先がファスナーの輸入販売を始めたのがファスナーとの出会いとなった。その後独立し、ファスナー部品の加工、販売で得た利益を消費者、関連企業、会社で分配し互いに繁栄する「成果三分配」を実践し、拡大する。会社経営の原点を「善の巡環」という言葉で表現し、世界のＹＫＫを育て上げた。

○教職に就きながら、県洋画界の振興に寄与した画家

川辺　外治（1901～1983）

師範学校を終えて福野小学校に奉職し、教職のかたわら好きな画の勉強を続けた。その後、東京府専科図画教員試験に合格。４年間の研鑽を終えて帰郷し、県立砺波高等女学校に転任した。以後、美術教育者として、また自らも洋画家として本格的な創作活動を展開した。戦後、県下美術界の再生に努め、昭和33年に県内の美術家を結集して「彩彫会」を結成した。

○保育事業の先駆者

堀田　くに（1888～1985）

回船問屋の四女として生まれた。高等女学校卒業後、篤志看護婦として努めた後、回船問屋を切り盛りし、その行動力から伏木町婦女会長に推された。伏木付近に一日中置き去りにされている子供たちに心を痛め、尼寺を借りて子供を預かり始めた。県内で初めての託児所であった。昭和56年まで伏木保育園園長を努め、働く女性とその子供たちのために生涯をささげた。

第26回　富山県版造形教育作品展
（6月9日～7月8日）

・「ラポール」で展示された中から、さらに選ばれた優秀な作品なので、自分の作品がそこに入っていたこともうれしいし、他の人のものも見ていて勉強になったので、来てよかったなあと思いました。
・幼稚園児、小・中学生とも、それぞれの発達段階に応じてみんなとても素晴らしい作品ばかりで感心しました。多くのみなさんに鑑賞の機会が与えられるといいなと思いました。

―― 来館者アンケートより

きらめき未来塾（夏休み期間中）

思考道場
「スペシャル道場」
講師　秋山　　仁
（数学者、東海大学教授）

思考道場
県内講師
竹内　一、鈴木和代、土肥和美、
岡本　薫、城下晴美

お笑い道場
講師　三遊亭　圓窓
（落語家）

右脳活用道場
講師　ねじめ　正一
（詩人、作家）

日本語道場
講師　高梨　敬一郎
（関西国際大学客員教授、
元ＮＨＫアナウンサー）

マセマティカル・ワールド展　（7月15日～9月9日）

今年のテーマは「数とくらし」でした。小学校５，６年生を対象にし、身近な生活の中での数表示をわかりやすく解説したものです。パネルや教具は、算数の発展学習として使える内容のものです。貸し出しできますので申し込んでください。

《特別展》

「自然に育まれたとやまの教育」展

4月21日（土）～6月1日（金）

展示内容

- 自然と学びの関係図
- とやまの豊かな自然
- 自然が育んだ教育（江戸時代）
- 全国に先駆けた実業教育（明治時代）
- 初等教育に生かされたとやまの自然（明治後期～大正）
- 戦争時代における教育ととやまの自然（昭和初期～大戦）
- 粘り強さと創造力が支えた戦後の教育（戦後）
- 科学及び技術の革新を求められる（昭和30年代、40年代）
- 科学施設の充実、コンピュータ教育の導入（昭和50年代以降）
- 自然を生かした教育活動
  富・堀川小、高・太田小、南・利賀小
  くろべ水の探偵団、富・八尾中、砺・庄西中
  高・中田中、富山北部高、海洋高
- 校歌に歌いこまれた自然
- 立山登山
- 富山の自然と伝統的な産業
- 厳しい自然に耐え、生活を守るための工夫から生まれた伝統的な産業
- 富山県に残る科学的遺産
- 富山県ゆかりの科学者たち

富山県教育記念館　研究紀要

「自然に育まれたとやまの教育」

平成19年３月発刊

本書は、県内の小学校、中学校の先生方によって、たいへんなご多用の中、調査研究を進められ、まとめていただいた。また、長井真隆先生、米原寛先生には対談を通じて多くのことを教えていただいた。ともに心から感謝申し上げたい。願わくば本書が今後の県内各学校における理科や社会科、総合的な学習の時間などだけでなく、世代を超えて広く自然に学び続ける生き方の参考としていただけたらと思う。

㈶富山県ひとづくり財団　富山県教育記念館　館長　齊藤和夫

―― 「発刊にあたって」より抜粋

富山県の自然のすばらしさが昔から教育に生かされてきた。その中で富山県の人々は育っていった。その恩恵には計り知れないものがある。それをわかりやすく多くの図表にまとめられている。多くの先生方（現職）に見ていただき自信をもって、自然を中心とした体験活動を行ってほしい。

―― 来館者アンケートより

―― 執筆者（特別部会専門委員）――

栗山　伸治、安井　俊夫、古川　桂子、山本　　茂
林　留美子、森内　裕之、半井　優子、新夕真希夫
内田　浩子、齋藤　真紀、田島　　寛、白石　　豊
松島　　享、鍋島　一仁、西田　　誠、佐原　孝信
（職名、敬称略）

元気な地域づくり活動を行う人材の育成及び支援事業

主催　㈶富山県ひとづくり財団

平成19年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業（助成対象校１校に10万円助成）

―― 将来にわたって、ふるさとを愛し、ふるさとに誇りをもつ子どもの育成を願い、
地域と連携して「ふるさと学習」に取り組む学校を支援します ――

助成校	研究主題
富山市立堀川小学校	個が育つ教育経営
富山市立蜷川小学校	はたらきかけることを楽しむ子供の育成
富山市立神通碧小学校	人とのかかわりを大切に、主体的に追究し、自分のよさを生かそうとする子供の育成
高岡市立古府小学校	自らの課題を見つけ、主体的に追究し、自分の生き方を考えて行こうとする子供の育成を目指して
氷見市立女良小学校	ふるさと女良の宝調査隊

平成19年度「水みらいプロジェクト」支援事業（富山県ひとづくり財団及び富山･水･文化の財団から各５万円助成）

―― 小中学生に「水」に関する学習や調査活動を通して、「水」に対しての興味を高め、
「水･環境」の大切さを認識する実践に取り組む学校及び団体を支援します ――

助成校、助成団体	研究テーマ
入善町立入善小学校	見つめよう　ふる里の自然
魚津市立村木小学校	鴨川を探る（鴨川の環境について考えよう）
魚津市立西布施小学校	学校にホタルをとばそう
立山町立釜ヶ渕小学校	かまがふちの水みらいプロジェクト
射水市立大門小学校	大門の水調べ隊
氷見市立十二町小学校	育てよう　ふるさとの宝「オニバス」
砺波市立庄南小学校	わたしたちの庄川　現在・過去・未来
くろべ水の少年団	くろべの自然（郷土の水環境）に接し、自然からその偉大さや大切さを学び、郷土を誇り、豊かな水に感謝し、守る心をはぐくむ。

４月に行われる「県小・中校長会」にて、上記支援事業の実施要項を配布しています。

平成19年度後半の展示予定

○第23回退職教職員厚生会、富山支部会員作品展	10月19日(金) ～10月28日(日)
○第25回「みんながんばってます」作品展	11月 4日(日) ～11月18日(日)
○第19回富山県造形教育作品展	11月24日(土) ～12月９日(日)
○「アイディア・ロボット・フェスタ」	12月15日(土) ～１月27日(日)
○第18回富山県中学校美術展	２月９日(土) ～２月25日(月)
○富山大学学生卒業記念書展	２月29日(金) ～３月９日(日)
○第１回富山県版造形教育作品展秀作回顧展	３月15日(土) ～４月13日(日)

「子どもの目・自然不思議発見」写真展　　9月24日(月) ～10月14日(日)

子どもたちの大写真展

花のしずく

1円玉より小さいかえる

カニのだっぴ

青サギが魚をたべている

鼻のあるナスビ

真っ赤な夕焼け

天使のわ

お母さんのズボンにくっついたせみ

庄川の奥の水辺で見つけためずらしいトンボ

雨あがりのくものすは、宝石だ！

葉っぱのような　が

稲をかじるサル

あ・と・が・き

夏休み期間中は、多くの子供たちの来館があり、活気に満ちていました。一流の講師による四つの道場（右脳活用、日本語、お笑い、思考）が開催されたからです。「子どもの目・自然不思議発見」写真展へは、408点の作品が出品され、大写真展となりました。特に休日は多くの来館者でにぎわいました。今年度後半の恒例展へもぜひお出かけください。